

パンローナだより

近 松 洋 男

昨年7月の末からスペイン東北部のナバラの大学にこもり、8月に西部エストレマドゥラ、ポルトガル及び北部地方を遍歴したこととクリスマス休暇に旧遊の地に旧友をおとずれるためサラマンカと旧都レウダ・ロドリゴ及びマドリーを歴訪した以外はこの古い町——ポンベイウスの創設した城塞都市（今も堀と城壁とアケドゥクトがよく保存されている）にひきこもった生活であるので、厳密な意味ではスペインと題しないでナバラと言った方がよいかも知れない。

ローマの時代以来、この地の人々は独特の強い気質と独立心の故にたえず戦い続けた歴史をもっており、今もスペインでは唯一の経済独立州で国民一人当たり年間所得は1000ドル余りでスペイン中第一を誇っている。ここでは人々は早朝暗いうちから働きはじめ一日10時間働き、siestaをとるひまがないというくらいで、まじめな気質は日本人のそれとしばしば比較される。ここも経済成長がよく論じられ、事実エレクトロニクスなどの近代工業が日々発展しているのが見られる。バスクの人々の間では何ということなく日本人に親近感をもっており、また不思議に地名などで日本語やアイヌ語に近いのがあり驚かされる：先日友人と訪れた山の家のあたりがIsaba（母音の間のbは日本語のw）で井沢と同じ発音であり、近くに沢があり、井沢と関係がありそうな気がして人々にたづねても、古い名でその意味を知っている人がなく残念に思っている次第。（Navarra全州にわたり一般にbilingual）

日本人が古くから力技をこのむようにこのの若者達は大きな石をかつぎ上げたり、薪木割り競争をやったりして、日本の農村青年と似たところが多い。多雨型風土に関係がありそうである。

工業発展のため若者達は村を去り、いわゆる「三チャン農業」になっているのは日本と同じ現象である。

スペイン中もっともカトリック信仰のあついで、人々はなおザビエルの偉業を誇り、12月のザビエルの日には早朝からバスにのりザビエルが若い頃修業した修道院¹¹Castillo de Javier¹²におまいりする。8日の聖母マリアの祝日で終る12月の第1週には町の有力者、大学関係の人々など毎晩大聖堂に集り santa misa にあづかるわけで、社会生活がカトリックと全く一致しており、青年達も静かに祈りをささげている姿は日本と大分異っており、道徳的には一段とかたく、きびしく、犯罪のない静かな落ち着いた社会環境が作られている。情熱のエスパニョラ、フラメンコの踊で想像されるイメージはこの地では全く見られぬもので、若い男女は年に何回か行われる町の plaza での深夜に及ぶダンスパーティーと市の北にある唯一の近代式バーで最近流行の音楽と踊をたのしむ程度で、大学生などはかたい、きびしい生活態度で学業を続けており、この点日本と生活の意識がとても異っているので当地に留学する日本人は当初息ぐるしく、あせる傾向が見られるが、当地の自信に満ちた落ち着きはやがて精神の糧となる。

言葉がよく出来ても、この地の人々の気質が南部の人々のように開けひろげでないので、友人として迎えらるるまで1月余りの孤独を味わされ、漸次クラスメートとして受け入れられるのであるが、「今日はあの人が話してくれた」と心からよろこべる数週を経て終に全員

と親しくなれる次第で、この点は以前のサラマンカの経験と少々異り、留学当初の精神的孤独と知的会話の欠如は未だにありありと思い出され、現在の多数の友人知己との友好関係を感じている次第である。

人々はすごく音楽の才にたけており、建設労働者が二重唱をしながら働いているあたり、音楽が生活にとけこんでいる感じで、大学生も歌えば必ず二重唱になる。

日曜日には一切が休みで、店をのぞくたのしみもないのであるが、大学の帰途にブラリと古い町をそぞろ歩きし、民芸風の table center や皮製品、さては昔の羊飼いのベルトとか羊につけた鈴など拾い買いする楽しさは格別、いづれ運送中に割れると知りつつも九谷焼に似た Valencia の動物画の焼物をながめ、乏しい財布をはたく楽しさ。

最後になって申し訳ないわけであるが、当大学のロマンス研究の一端にたづさわる者としてその方法論を少々紹介しなければならぬかと思う。スペインでは高等学校ですでに文科系と理数科系に分れ、前者にはラテン語ギリシャ語アラビア語中から二語をとることが必須で大抵は前二者を充分勉強させられる。フランスと同様に国家試験にパスすると bachelierato の資格が得られ、好きな大学に学べるわけで、そこで 1、2 年生の間に再び古典語の勉強をたたきこまれるのでラテン語については豊かな実力をもっている。latin vulgar まで学ばされ、更に Menendez Pidal の言語学を 3 年生で徹底的にやり、4 年生では言語演習で古叙事誌 Cantar de mio Cid をよみ、語源から latin vulgar さらに castellano への音韻変化を日々論じて行くやり方で、5 年生では同じやり方で方言学、ダンテの神曲、フランス文学の解釈など実に多量に早くやらされる。徹底的暗記と応用(ラテン語にもとづいて)を要求され、大半は家で勉強で実力のうらづけがなされる(しばしば試験が行われ、家で勉強の程度がたしかめられる)。Estudios románicos については大学を出るときすでに立派な専門家になっているわけで一般のレベルは非常に高い。日々きびしい勉強がつづくので、この点日本の大学生達はスペインへ来れば大分戸惑い血のにじむ思いをさせられる。したがって外人コースのみで終る人が大半である。英語には一般に弱い傾向がみられるが、先生は最近の北米における言語学の発達を度々講義中で紹介するので、夜の外国語コースで英語をとる学生がふえている現状である。

スペインの文化とくに文学はラテン文学の基礎の上に立っているのでラテン語の知識なくして何が出来ようか? というのが当地のロマンス研究の基本的態度である。

とりとめもない紹介になってしまったが、いくらかでも参考になれば幸甚であり、今後のロマンス語研究の発展をのぞむ次第である。

[45 ページより続く]

1 1 3

「かのヘロストラトスは世の人々に
その名を喧伝されたばかりに
名工クテシフォニオス造管の
ディアナの宮居を焼きはらいました。

もしまた揚名の欲望がわれらを
そうした仕業であざむくとしても、
不朽のしごとを企てる人士は
久遠の栄光をのぞむべきでしょう。」